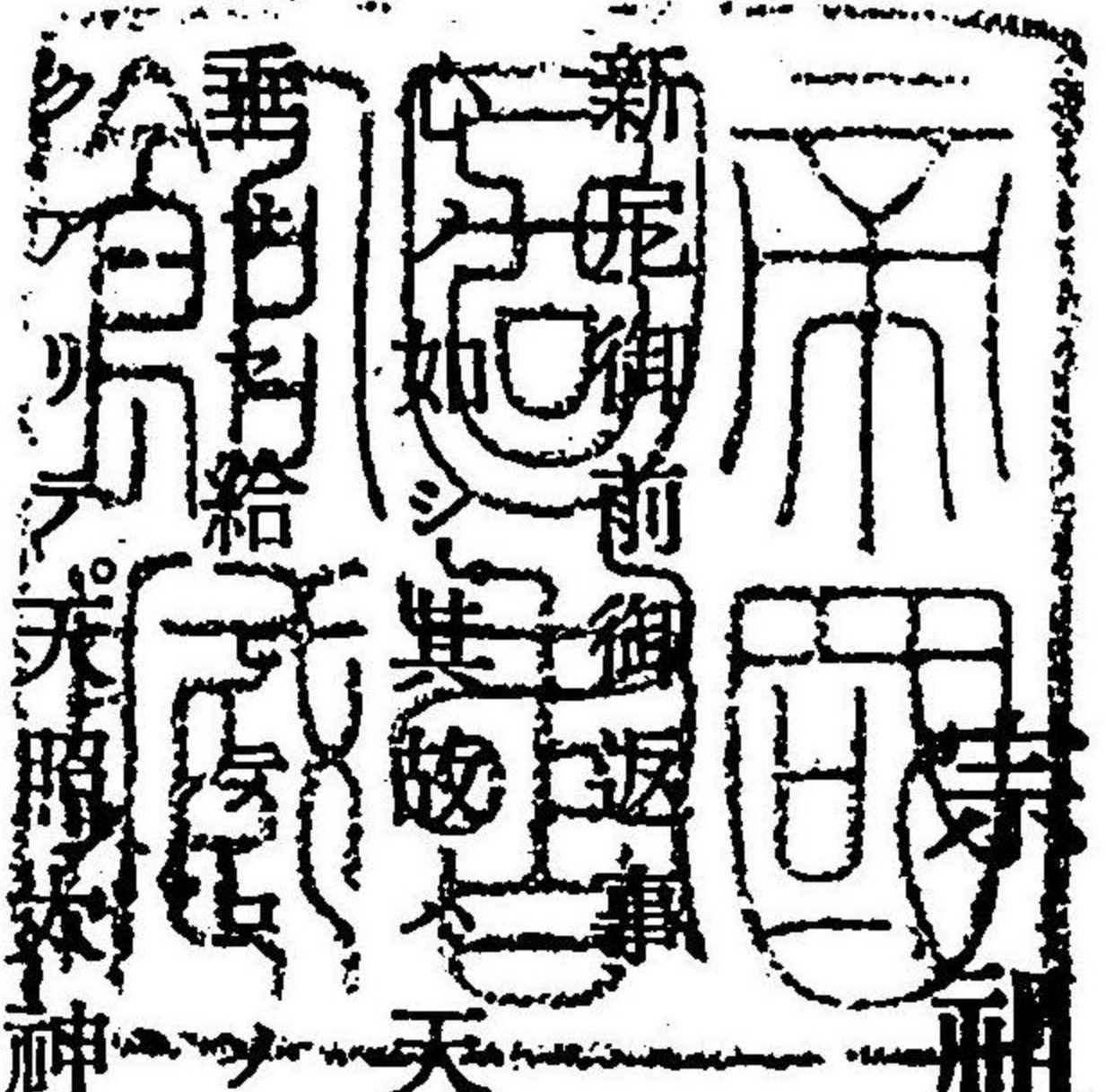


0-4

217
378

蓮花の巻物

宗祖遺文



安房國東條ノ郷ハ邊國ナレドモ日本國ノ中

天照太神跡ヲ垂レ給ヘリ昔ハ伊勢ノ國ニ跡ヲ

垂レ給ヘリ其故ハ天照太神ノ御歸依淺カリシカバ太神忿リオボセシ時

源右大將ト申セシ人御起請文ヲ以テアマツオカノ小大夫殿ニ

仰付テ頂戴シイセノ外宮ヲ此處ニ忍ヒ置セ給ヒシカバ太神

ノ御心ニ協ハセ給ヒケルカソ故ニ日本ヲ手ニ握ル將軍ト成リ

給ヒヌ此人東條ノ郷ヲ天照太神ノ御栖ト定メサセ給ナレバ此

ノ太神ハイセノ國ニハオハシマサズ安房國東條郷ニ住セ給

フ歟例モ八幡大菩薩ハ昔ハ西府中比ハ山城國男山ニ移リ給



ヒ。今ハ相州鎌倉鶴ヶ岡ニ栖ミ給フ。此モ又カクノ如シ。日蓮一閻
 浮堤ノ内。日本國安房國東條郷ニ。始テ此正法ヲ弘通シタリ。隨テ
 地頭敵トナル。彼者己ニ半分亡ビ。今半分ナリ。領家ハ偽リ愚カニ
 シテ。或時ハ信シ。或時ハ破シテ。不定ナリシガ。日蓮御勸氣ヲ蒙リ
 シ時。既ニ法華經ヲ捨給ヒキ。日蓮先ヨリ見參ノ次デ毎ニ。難信難
 解ト申セシハ是也。

法華經講義

目次

鍊曉八幡鈔の一節を講ず……………星下貫主・脇田權僧正

教相觀心の説……………大檀林教頭 風間權僧正

ふたば旃檀……………(月の卷)……………大檀林教授・中村僧都

高祖御降誕日に就きて……………幸田露伴

蓮

の か せ り

(二一輯)



諫時入幡鈔の一節を講す

脇田 竟 惇

諫時入幡鈔ニ云ク天竺國ヲ月氏國ト申ハ佛ノ出現シ給ヘキ名也扶桑國ヲ日本國ト申事ニ聖人出給ハ其ランヤ月ハ西ヨリ東ヘ向ヘリ月氏ノ佛法ノ東ヘ移ルヘキ相也日ハ東ヨリ西ヘ入ル日本國ノ佛法ノ月氏ヘ還ルヘキ瑞相也月ハ光不明在世ハ但八箇年也日ハ光リ明ニシテ月ニ勝レタリ後五百歳ノ長キ闍ヲ照スヘキ瑞相也佛ハ法華經誹謗ノ者ヲバ治シ給ハス在世ニハ無リシ故ニ末法ニハ一乘ノ強敵充滿スヘシ不經菩薩ノ利益是レ也各我弟子等ハハクマセ給ヘ

此書は録内二十七の卷にして弘安三年十二月我祖御年五十九歳の時の御製作にして即御入滅を距ること僅に二年前の御筆にかゝれり此書一卷の主旨は我祖種々の大難に逢ひ給ふは法華弘通の故なりされは入幡等の諸天善神も法華行者の我祖を守護し怨敵を治罰すへきは靈山の約束なるに左もなき程に入幡

を諫言曉諭し給ふ故に諫曉八幡鈔と題する也本文は其卷末の一節なり此一節
 まての文意は大略夫の錄内十六四條金吾許御文即小八幡鈔といふものと相同
 じ唯此一節の御文章の如きは仔細に拜讀し來る時は大々的議論の存せるあり
 て特に御威徳の廣大なるを覺ゆるなり元來古人の書を讀むにはよく文底の意
 言外の味に注意するが尤も至要である眼光透楮背といふ位てなければ活眼と
 活書と相伴ふこと能はずして死眼と死書と相依ることになる謂ゆる讀無字書
 又は彈無絃琴といふ如きも其よく讀書眼を備へて文底の深意を悟り其よく彈
 琴の法を知りて絃外の妙趣に達する類に外ならざるべし故に總て書物を播く
 には用意周到にて讀むへし何に況や我祖の御文章を拜覽するには尤も用意周
 到ならざるべからず其文體が多くは和文又は消息體なるを以て漫然讀過する
 如きでは蛇目である余は今より十年前某老宿と御書の法門を論談したる時老
 宿は余に向て實に御書を拜讀する時はヲソロシキ觀念か起りて容易に讀めぬ
 といはたれり其當時余は左まで思はざりしが此三四年來御書に對する毎に謂
 ゆるヲソロシキ觀念起り獨り案頭に端坐し肅然として合掌し更の移るを知ら

ざるものあり夫の老宿の余を欺かざるを知れりヲソロシキの一語竊かに知言
 として敬服せり
 余は又少しく極端に涉れる嫌ひあるか如くなれども御書を拜讀するに就ての
 根本的用意として左の如く自家の讀書律を標せり云く信を以て讀むへし智を
 以て解すへからす此語が余の御書を拜讀する意得てある夫れ一信起れば百解
 隨て生ずるものにして小智の分齊を以て淺薄杜撰の解釋を下すより寧ろ御書
 の文章言語のまゝに信して拜讀する方が肝要である余は之を信讀と稱せり
 此信讀久しき時は妙解髣髴として生し自ら案を拍て快と呼ふことあらん之を
 要するに我祖の御文章に對して輕易の觀をなし疏釋の音即書物視しては極め
 て不可なり試みに思へ末法の唱道師は我祖にあらすや日本國の聖人は我祖に
 あらすや既に已に然りとせば我祖の御書は末法の法華經ともいふべし日本國
 の聖教ともいふべし此經教に對して書物視する如きは所詮信仰の微薄といふ
 の外なきなり
 是れより本題に入て一往文相上の概略を講話し而して後一二の鄙見を吐露す

ることせん

天竺國ヲ月氏國ト申ハ佛ノ出現シ給ヘキ名也扶桑國ヲハ日本國ト申豈ニ聖人出給ハサランヤ

大聖釋迦牟尼如來か出現し給ひたる天竺國を月氏國とて月の國と申は自ら夫の智徳圓滿月の如き佛陀か出現し給へき名であるなり名詮自性又は名隨徳用の義にして天竺國の國土其物の名字の上に佛陀の出現を意味してある即釋迦如來の彼の國に出現し給ひし次第なり……我扶桑國をば日本國とて日の本の國即日の國と申す惟ふに智徳光明日の如き聖人の出現し給はぬ筈はないのである……夫れ既に月氏國に佛か出現して佛法を興立されたる以上は日本國にも聖人か出世して聖道を建設すべきは當然の理勢ならずや豈ニ聖人出給ハサランヤの一語頗る意味深長を覺ふ後に至て講述せん

月ハ西ヨリ東ヘ向ヘリ月氏ノ佛法ノ東ヘ移ルヘキ相也日ハ東ヨリ西ヘ入ル日本國ノ佛法ノ月氏ヘ還ルヘキ瑞相也

巧みに前の日月兩字を捕へ來り其運行に託して佛法流布の次第を説盡せらる

眞に妙絶といふへし初め月の文は讀んたる如く月氏の佛法は其月の東へ東へと向て運行するか如く西天竺より漢土日本と東方へ傳通したり即佛法の東流東漸の様をいひしなり……次の日の文は旭日東山に昇り夕陽西嶺に昏つく日本國の聖人の建設せられたる佛法は日の西へ西へと向て運行するが如く東日本國より次第に西へ流布して月氏へ入るを云ふなり此文も仔細に拜讀する時は大に妙味の存するが如し……(後に至て講述せん)

月ハ光不明在世ハ但八箇年也日ハ光リ明ニシテ月ニ勝レタリ後五百歳ノ長キ闇ヲ照スヘキ瑞相也

又日月を捕へ來りて其光明を比較して我日本は彼の月氏國に勝れたる趣を示し門弟を策勵し給へり古人の註釋にも此文より以下二義を以て日本の月氏に勝れたるを示し給へりと指南せり即此文は其第一義にて日光と月光との甲乙を以て八年と後五百歳との長短に比して日本の勝れたるを示し給へるなり佛ハ法華經誹謗ノ者ヲバ治シ給ハス在世ニハ無リシ故ニ末法ニハ一乘ノ強敵充滿スヘシ不輕菩薩ノ利益是レ也

此文は第二義にして強敵の有無に約して未代の難を忍び逆化を施し佛種を衆生の心田に植へしむるは在世順縁の化導に勝れたるを規模として日本の勝れたるを示し給へるなり

釋尊の在世には大率ね順縁の機類のみにして誹謗の者なかりし故に教化極めて容易なり教化容易なるか故に誹謗者を治し給ふ程の功もなかりしなり未法には三類の強敵紛然をして充滿せり是れに對して逆化を施し百難を忍ぶは取りも直さず夫の不輕菩薩が増上慢の四衆に對し我深敬汝等の二十四字を唱へ禮拜讚歎の行をなし杖木瓦石の難に甘んじて衆生を利益すると一般なり……

……二十四字即妙法蓮華經なり……

各我弟子等ハケマセ給ヘ

此一語頗る激切にして獅子一吼百獸皆伏の概あり前文より秩序井然として國は是れ日本國にして月氏に勝れ時は是れ未法にして在世に勝れ法は是れ正像未弘の大法なることを層々叙し來りて結末此一語を着け萬難の以て撓避するに足らざるを斷盡して門弟等の弘通の壮志を激發し給ひしなり掉尾有力とい

ふべし

上來は唯此文章の文相上を一往講じたるまでなり是れより一二特に思付たる鄙見を吐露せんと欲す是れは古人の指南にも未だ見當らぬ議論にて眞の余か御書を自分限り仔細に拜讀したる結果として得たる所の解領なれば謂ゆるヲソロシキの觀念に堪へされども忍んで大膽の語を吐て講演を試みんと欲するなり請ふ諒察せよ

○扶桑國ヲハ日本國ト申豈ニ聖人出給ハサランヤ

是れは前にも一應講演したれども更に再往其文旨を敷衍すれば左の如くてある……夫れ月氏國に釋迦如來といへる佛出現し給ひたり既に月氏國に佛が出現せられたる以上は此日本國にも彼の月氏の佛に對すへき程の聖人の出現し給はぬ筈はなかるべし而して其聖人とは其前に輩出したる傳教弘法等の權迹の人師にはあらずして神力別付の妙法蓮華經を弘通する本化の大士なり而して其本化の大士とは豈異人乎即ち法華全部を口に心に身に讀みたる日蓮其人を措て誰れそやとて自ら其指頭を以て其鼻頭を指したるか如く顯然露骨に

之を説破せず陰然として地歩を占め本化上行末法應時の大導師たることを暗々裏底に示し日本國の聖人を以て自ら任し給へり夫の本尊問答鈔に日蓮ハ其人ニハ候ハチトモ粗ホ意得テ候ヘハ地涌ノ菩薩ノ出サセ給フマデノ口ズサミニアラアラ申候テ況滅度後ノホコサキニ當リ候也等といひ給ひしに同じ。豈ニ聖人出給ハサランヤの一語婉曲頗る妙といふべし。

或一類の學者達が我祖を稱するに聖祖の語を以てする大に其當を得たるか如し古來より我祖を稱するに法主又は元祖又は高祖又は宗祖の字を以て冠頭の尊稱とすれども此御文章等に依て考ふる時は聖祖の字面特に典據確實なるを覺えたり併し余は余の自信に依て常に吾祖と稱せり……

○日ハ東ヨリ西へ入ル日本國ノ佛法ノ月氏へ還ルヘキ瑞相也

此文の日本國の佛法とは如何なる佛法を指したるや我祖出現以前即ち正像時代に流布せる佛法にはあらざるなり彼れは謂ゆる西ヨリ東へ向ヒたる月氏の佛法の殘餘ともいふべきものにして末法に至ては無用のものたり十八圓滿鈔に云く所詮入末法天眞獨朗之法門無益也云々天台既に無益なり其餘の法門論す

るに足らず是等の宗教を以て日本國の佛法と稱することを得ず……然らば日本國の佛法とは何を指してか適當なるやといへば當に知るべし末法の大導師大日本國の聖人たる吾祖日蓮大士其人の建設し弘通する所の日本的宗教を以て日本國の佛法とは稱すべきなり更に之を簡明にせば月氏の佛が出現して月氏の佛法が起れり日本國の聖人が出現して日本國の佛法が起るといふことなり……日本國の佛法の一語嶄新眞に破天荒ともいふべし……

○日ハ東ヨリ西へ入ル日本國ノ佛法月氏へ還ルヘキ瑞相也

夫れ月氏の佛法は東漸したるが日本國の佛法は西漸するといふ意味である即佛教西漸の豫言とも稱すべし……報恩鈔に云く日蓮カ慈悲廣大ナラハ南無妙法蓮華經ハ萬年ノ外未來マテモ流布スヘシ此萬年の外未來マテとは眞に規模宏遠の立言である……末法萬年は法華流布の時節と確定すれば無論のことである其萬年の外未來までもといふのである外字よく着眼して讀むべし……遠鑑炬の如く泰西諸國の學者宗教家か近來頗る佛教を研究しつゝあり特に大乘佛教に着眼し日本の宗派に向て研究の度を進め來れるが如く今や日

本國の佛法西漸の兆を呈しつゝあり唯吾人の力行如何を顧るにありのみ我各弟子等ハケマセ給への誠語丁寧なるは豈に獨り當年の弟子檀那に限らんや蓋し我祖は佛教の主權を我日本國に握らんと欲する絶大の抱負絶大の希望を懷き給へり即自家の建設弘通の日本的宗教を以て宇内宗教の統一を謀るにあり故に常に日本の二字を以て自主の地を占め日本乃至一閻浮堤一同ニ本門ノ教主釋尊ヲ以テ本尊トスヘシ等と揚言し給へり

我祖の抱負其れ此の如く大なり我祖の所期其れ此の如く大なり然り而して僅々四五千の寺院七八千の僧侶と五六十萬の檀信とを有せる蕞爾たる一宗派の宗祖視するに至りては果して如何の感あるや慨歎又慨歎といふの外なし……

嗚呼未法萬年の外未來までの時間と空間とは日本國の聖人たる我祖日蓮大士が建設し弘通する所の日本國佛法の唯一占領する所にあらすや……

編者申す此一文章は臨田僧正が明治三十三年二月十六日大檀林降誕會に於て演説せられたる筆記を載録したるなり

教相觀心の説

風間 隨學

吾が佛教に教相觀心の二門の別あり此の教相觀心のことを又は教義觀道とも、教解觀行とも名く先づ其の名義を釋すれば教相とは天台大師と法華玄義に「教とは聖人下に被らしむるの言なり相とは同異を分別するなり」と釋せられて教は教令と云てすべて上位のものより下位のものに論ず義にして悟りの佛が迷ひの凡夫に對して説くところの轉迷開悟の一代の教法言詮を云ふ相とは相貌と熟してすべて現象界の事物に醜美黑白大小方圓等の異ありて外より覽て明瞭に分別の出來るものを云なり佛の説き玉へる一代五十年の教法には小乘大乘あり權經實經あり或は顯密靈妙或は純雜多少等ありて其の浩濶にして容易に真相を窺ふべからざること岸頭に立て大海を望むに唯だ茫漠たるに迷が如く其の複雑にして一見同異を辨し難きこと暗夜に仰て衆星を觀るに殊に紛亂を覺ゆるが如くなれども仔細に點檢し彼此對照比較するときは秩序整然として錯亂せず一代教法言詮の上に於て大小權實等の分別の出來るを相と云ふ則ち教の上の相なるを教相と

云なり。次に觀心とは己心を觀照すると云ことにて、心とは吾人が日夜に有形無形の境に對して起す所の慮知分別の作用を呈する靈妙不測の心性界を指すものにして、即ち佛の説玉へる教理を自己の一心に入れ、吾が物にして親しく觀照修練するを云なり。

既に二門の名義を釋し終れば、次に正しく二門の異點及び相互の關係を述べざるべからず。抑も教相門なるものは其の説如何に幽微高妙を極むと雖も、口業を以て道理を説明し、言詮を以て法理を解釋するのみなれば、猶ほ六韜三略に兵法軍器を説き、醫書に藥性治方等を明すか如きものなれば、客觀的にして理論門に屬するものなり。觀心門は儒に謂ふ所の克己復禮の方にして、吾人の真理界に進入し、涅槃の城に到達せんと欲する所の適切なる實踐方なれば、名將の兵法軍略を心に得て、敵に對し實地に之を活用し、勝敗を機微の間に決するか如く、良醫の藥性治方等を識達して親しく之を病者に施し、回生起死の奇効を奏して、其の手腕伎倆を示すか如きものなれば、主觀的にして實踐門なり。古徳は此の二門の異を分別して、教は淺くして廣く、觀は深くして狭しと云へり。其の所以は、教相は佛陀の隨機應類の説相な

れば廣しと雖未だ直接的の實踐方にあらずれば淺く、觀門は實際的に開悟得脱の工風を凝す方なれば深しと雖、佛陀の教理を自己當位の一念に會歸して照すものなれば狭しと云べし。之れ教觀の二途を別つ所以なり。然に此の二門は相離るべからざるものにして、猶ほ人の目と足の二つ兼ね備り相ひ依て自在に活動する故に偉大の事業も其の功を奏するか如く、二門相待ち相資て始て吾人の本意を達せしむるものなれば、且く二途を分つも其の實一途に歸するものなり。故に其間に城壁を構へて永く二途を存すべからず。况や取捨を其の間に立つへけんや。故に大論には、**智目** (教相は道理を了解せしむるを) **行足** (觀門は實地に修練せしむるを) **清凉池** (天竺は熱國なれば清凉地を) **に到ると云へり**。然に誤て永く二途を存し取捨を立て、教の一に執して觀を捨るものは、跛者の兩足を進むることのあたはさると同く、決して涅槃の城に進趣することあたはず。若し觀門の一に偏して教を輕んずるものは、盲者の岐路に迷か如く、終に邪徑に彷徨するを免れず。然れば二門は密着の關係を有して須臾も相離るべからざるや粗ぼ知るべし。

今更に細説すれば、謂ふ所の教相とは、佛陀が無量劫來苦修練行の曉宇宙の真理を

大悟徹底し涅槃の山頂に登て生死海中を瞰給に、一切衆生は三毒五欲の塵に汚がされ四苦八苦の衝に墮ひ身（身も亦も）より身（身も亦も）に入りて自ら覺知せざること、宛も吐龍の天日と恐れ、夢虫の辛に習ふと擇ふなし、是に於てか佛陀は大誓願を起して、涅槃の山頂より下て生死の海に慈悲の舟を泛べて、衆生を救はんと欲し給に、衆生の機類千差萬別にして一様ならざれば、機に隨ひ類に應じて法を説き教を施し給故に、法門無量にして、且く大教を擧るも猶ほ八萬四千の多に至れり、既に隨機應類の説なれば、其中、大小權實、蘊妙淺深等の差別なかるべからず、之れ容易に其の分類を知るべからざる所以にして、古人の教相判釋紛起し、蘭菊美を争ふ所以も亦偶然ならざるを知るべし、今且く天台の判釋に依るに、一代教法の分類五時八教を出でず、謂ふ所の八教とは、頓、漸、秘密、不定、（化儀の四）藏、通、別、圓（化法の四）なり、五時とは華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃（法華涅槃は合して一時とす）なり、此の中、化儀の四教と五時とは、堅に佛の化を設くる一代始終の部類を大判し、化法の四教は、横に佛の機に隨て物を益する當座の教理を細釋したるものなり、先づ化法の四教と云は次第に前は淺く後は深し且く之を大小權實に別たは、藏は小乘後の三は大乗、前の三は權教、圓の一は實教とす

故に最上の機には圓教を説き稍々下る機には別教を説き更に下る機には通を説き最下の機には藏教を説くなり、次に五時の上にて佛の最も難化とする二乘（聲聞緣覺）の機を堅に次第に調熟し給ふ様子を示さば、初に華嚴に於て圓に別を兼説して佛本懷の一端を示し給と雖、二乗の少智狹量なる毫も信解すること能はざるか故に次に阿含に於て最淺の小乘を説て一分の益を得せしめ大乗に入るの基礎となし次に方等に於て四教並説して大乗を信せしめ、次に般若に於て通別圓を説て大乘を解せしめ、後に法華を説て大乘に悟入せしむ、出世の本懷是に於て満足す、最後に涅槃に於て更に四教を具説して餘殘の機を救ひ玉ふ、次に化儀の四教と云は五時中華嚴は頓、阿含方等般若は漸なり、秘密不定の二は前四時通有性のものにして、四みな佛の衆生を化する儀式の差別なれば法華には通せざるなり、是の如く、佛陀横堅自在の所説の法の中に於て種々差別ありと雖、佛陀自行内證の第一義諦絕對界より第二義門相對界に下て施し玉ふ所の化他外用の上の差別なれば教相と云なり、次に觀心とは教相已に小大權實等の別あれば觀心も亦其別なきにあらざれども要するに佛陀の教理を自己に服膺し、偏に教線にたどりて進路に躊躇せず、一步

にても上段に進むことを期し、着々涅槃の山頂に向て歩を進め、佛陀の境界と一致するにあらざれば止まざるの工風をなすものを云なり、然れば教觀二門は別に二途あるにあらざりして、同一線路を往復上下するものなり、一代の教法は、佛陀己心の觀智が機感に叩かれて外か口業に顯れたるものなれば、衆生か教法に依て修行するは佛陀の踏わけ玉ひたる路を尋て更に歸着せんとするに過ぎず、但た佛陀の衆生に教示する邊に約して教相と云ひ、衆生の實踐する邊に約して觀心と名くる異のみと知るべし。

已に二門の關係是の如にして其の歸一なることを知るも、亦二門の間に自ら輕重傍正あることを知らざるべからず、其の故は佛教は世の諸科學の如く、理論主義にあらざりして開悟得を目的とし、安心立命を教ゆるものなれば、今人の單に東洋哲學學の一科として研究するが如きは、元より佛教の本意にあらざり、故に此邊より云へば理論門に屬する教相は傍意にして、輕く實踐門たる觀心は正意にして重しと斷定せざるべからず、彼の現在一世に限る孔孟の儒教、尙ほ正心を本として修身齊家治國平天下を期するを主義とす、况や三世に互て自他兼濟を目的とする佛教豈に

實踐を正意とせざるの理あらんや、故に佛は理論門に偏する者を斥て、日夜に他の實を數ふるに自ら半錢の分無きが如しとの給へり、譬へば貧人の日夜に算盤を手にして、三井や大丸の財産を計算するも自身には銚半錢の利分なきが如く、觀心の實行無きものは如何に八萬の法藏を胸に浮ふるも、悟道安心の爲には寸益なしと誠に、實行の最も重んずべきことを反顯し玉へり。

以上は通途に教觀二門の概要を述べ終れば、以下正しく本宗の教觀二門を述べん先づ教相は天臺の五時八教の判釋を用ゆれども、更に本宗特殊の教相判なるものあり、天臺は五時八教を以て横に佛在世の一代教を判するのみなれども、宗祖は昔述本の三重を以て堅に佛の滅後に於ける正像末の三時に配して流布の教法を判せり、謂く昔とは法花已前の四時の教を云ふ、法花一部の中に二門ありて、前十四品に於て理性常住を明すを述門と云ひ、後十四品に於て事相常住を明すを本門と云なり、(本門とは釋迦佛久遠の昔、已に成佛せし本地を明すを云ふ、猶人の本住處を尋ねる相跡を示すを云ふ、猶人の在來の足跡の如し、故に述門と云ふなり)法花已前の四時の教は佛滅後正法千年に流布し、法花本門は(是れ天台所)像法千年に流布し、法花本門は(是れ宗祖所)末法萬年に流布す

と、昔述本の三重を正像末の三時に配して、滅後流布の教体を示す。之を名けて一代聖教三重配當と云ふなり。是の如く本化(本佛の所化と云ふこと、猶獨待の智見を以て重きを滅後に置いて一代の教法を判し、法花の如きは在世よりも滅後、滅後の中に於ても末法を正意として説きたるものなりと定むるが本宗別頭の教相なり、而して臺祖宗祖共に法花一部を弘め玉ふに、臺祖を述門所弘とし、宗祖を本門所弘となす所以は、佛陀所説の法花に二種あるにあらざれども、時機の進否に依て二祖の釋義に顯覆の異ありて、臺祖は本門の實義を隱覆して盡さざる所あるが故に、本門の文を釋すと雖も述門の義に歸するが故に一部唯述の法華と云ふ、宗祖は本門の實義を顯露して餘蘊なきが故に、述門と雖も本門の義に歸する邊あるが故に一部唯本の法華と云ふなり。故に台祖の本門壽量品を釋するや、證体の用と云て久遠の長壽は佛が述門所談の理体を證得し給ひたる用を説きたるものなりと、文上の儘淺く見て、畢竟壽量品は釋迦一佛の長壽談とすれども(是れ一部唯述とする所以也)、宗祖は爾らず釋迦佛久遠の長壽に寄せて、其實事の十界常住を明して衆生本有の果報を示したるものなりと、壽量文底の微意を開示し給へり(經文直に事の十界常住を明さずして佛の久遠に寄する所以は、重々の深義われども一々

の談にあらざれば略す)故に觀心本尊抄に『今本時の娑婆世界は三災(火水風)を離れ四劫(成住壞空)を出でたる常住の淨土なり、佛既に過去にも滅せず未來にも生せず、所化以て同体なり、此れ即己心の三千具足三種の世間也』と云へり。此本尊抄は宗祖自ら此書は日蓮身に當る一期の大事なりとの玉ひて、遺文六十巻中の骨髓なり、其中此文は古來四十五字の法体を稱して、壽量品の實義たる事の一念三千を明したる骨髓中の骨髓なり。

抑も上は日月星辰より、下は山河大地人畜草木に至るまで、有情非情を擇ばず、森羅万象一事として起滅せざるものなく、一物として隨緣せざるものなしと雖、復た一事として常住ならざるものなく、一物として不變ならざる物なし、事々物々悉く終日隨緣起滅し、終日不變常住にして、隨緣起滅の當相を離れて別に不變常住の實相あるに非ず、隨緣起滅は不變常住の体上の活動妙用なり、深く事物の眞意を觀破すれば、花は開落を奇とし、月は虧盈を妙とし、事々物々、新陳代謝し、事改まり物新なるを妙とす。夫れ陽春三月の佳辰至るや、東都百萬の士女、櫻花を觀んと欲して狂するが如く、競て東臺墨堤に向ふ。所以は、花の新奇なるを以てなり、又仲秋三五の良夜に

接するや風流の貴顯紳士が明月を賞せんと欲して急に旅装を調へ、汽車を山河百里の遠き松島に輾らしむる所以は、月に定期あるが故なり。若し松島の明月をして街頭の電燈を見る如く、夜々に光輝を放ち其容を改めず、東臺墨堤の櫻花をして造花の如く、一年凋落なからしめば誰か別に之を賞する者あらんや、若し人常住不滅ならば事業何時にても成すを得べしと、日を逐て空過し、放逸懈怠に流れむ、少年一度去て復た還らず、無常迅速にして人生定まりあるを以て、克く少壯にして奮起し苦辛を忍び學業も成功することを得るなり、故に生滅は諸法の妙用、天地の活動にして、年々歳々陽春の緑に逢へば、爛熳たる櫻花は枝頭に開き、皓々たる明月は天邊に懸り、塵點去來開て又落ち、隠れて又顯れ、盡未來始終一轍にして改まらず、開落の當處に於て花に不變の相あり、隱顯の當相に即して月に常住の徳あり、波の起滅の如く、車の輪轉の如く、一色一香一塵一微と雖も、無常の中に常ありて常と無常と須臾も相離るべからず。左れば娑婆國土に三災四劫無しと云ふに非ず、三災四劫の有爲轉變の儘にて常住の本土なり、游泥を存して蓮花清淨なるが如く、瓦礫荆棘便利不淨の穢土に即して清淨の佛國なり、故に今本地の娑婆世界は、三災を離れ四劫を

出でたる常住の淨土なりと云なり、諸佛衆生も亦爾り、生滅無しと云に非ず、畢竟過去の滅も永く滅無に歸せしに非ず、未來の生も始めて新生するに非ず、非滅にして滅し、非生にして生ずる者なれば、生滅に即して盡未來常住の覺體なり、故に佛既に過去にも滅せず未來にも生ぜず、所化以て同體なりと云ふなり、又十方三世一切諸佛は同性同體にして、唯一法性の天然自然の自在變現なること、一肉血增長變現して四支六根骨肉毛皮等の衆用諸形を緣起するが如し、其作用功能互に通じ相資け、一法一人の作用功能は、一切の法一切の人に周遍し、一切の法一切の人の作用功佛は、一法一人に叢集すること、珠と珠と相映し、燈と燈と相ひ照すが如し、差別即無差別、異に即して同、本來彼此物我の間に於て一點の隔異なく、唯一法界融通無礙の實相なり、是れ即ち娑婆即寂光即身是佛の實義なり、然に諸經に娑婆の外、別に他方に淨土ありと説くが如きは、一類の未熟劣機の者の爲にして、法華本門の意より見るときは、其實他方に寄せて、娑婆國土の純淨を示したるものなり、是の如き佛智所見の境界をば、釋迦佛自己に托して説き玉ひたるを、法華本門の大教と云なり、次に觀心とは、上に云が如く、唯一無礙常住の十界なりと雖、日月の光明に非ざれば、万象

を顯現する能はざるが如く、觀智精明ならずんば、其實相を見る能はず、之を譬ふれば、汽車、汽船、電信、電話、皆是れ天地の具徳なりと雖、ツット、フランクリン等の、人智の意匠發明あるにあらざれば、其用を現すること能はず、衣服、居室、飲食、天文、地理、文藝、武術、一切何物か、人功を假らざらむ、人若し放逸懈怠なるときは、万徳皆隱没し、精勵策進なれば、万徳悉く顯現すべし、惜ひ哉、衆生自ら迷て、日々貪瞋痴の煩惱を起し、本來寂光の淨土に住し乍ら、淨土を見ず、本有無作の覺体に於て、凡身を認め、日に其妙を用ゐて知らず、唯だ一の娑婆三界、一の肉体凡身なれども、佛より見れば、寂光淨土無作の覺体と見、衆生より見れば、無常の穢土苦果の依身と見るのみ、別に二の身土あるに非ず、迷悟の見に依て、淨穢苦樂の不同あるのみ、故に經に、衆生劫盡きて大火に焼かるゝと見る時も、我此土は安穩にして、天人常に充滿せりと説けり、上の二句は、衆生の見に約し、下の二句は、佛知見に約するなり、今更に例を擧ぐれば、一休禪師が攝津住吉の社に參詣の時、

「來て見ばこゝも火宅の宿どなるをなに住よしと人のいふらむ」と詠みたれば、神老僧と化して、

「來て見れば此處も火宅の宿なれど心をどめてすめば住よし」と返歌したることありと云ふ、此の一休の歌は、衆生の見に當り、神の歌は佛の見に當れり、是故に人若し一たび知見開きぬれば、十界の身土生佛は、本來己心の所具一念の影像なることを知り、娑婆即寂光、即身是佛の、妙果報を實現し得べし、故に祖書に、是れ即ち己心の三千具足三種の世間なりと云ふ、之を名けて、壽量文底の事の一、念三千の觀心と云ふなり、

宗祖は、是の如き壽量文底の觀心に據て、三大秘法(本門には本門本尊二に、本門題目三に、本門戒壇)を建立して、末代の我等に授與し玉ひたるなり、此の三大秘法は、高尙に失せず、卑近に流れず、今時時機相應の徹上徹下の要法なれば、今更に述べべきは、つなれども、餘り剰長に渡れば、略すべし、要を取て之を云は、本尊は行者己心に十界を具して、本來尊重なる相貌を、一紙一面(木像は紙墨の本尊を形像に、模造したるのみなり)に圖示したる所觀の妙境なり、題目は本尊を顯發する所の能觀の妙智なり、戒壇は行者所住の處、即是れ不思議解脱の道場なることを示すなり、故に行者本尊に對するときは、上の壽量の教觀二門の處に述べたるが如く、覺悟して妙法五字を唱ふるときは、宗祖が檀越四條氏に、たい女房と酒う

ちのみて南無妙法蓮華經と一へ給へ、苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂とも思ひ合せて、南無妙法蓮華經とうちとなへさせ給まへ等と、教誡せられしが如く、朝夕行住坐臥、恒に縛々として餘裕あらば、人世不慮の災變に、駭ろかざるのみならず、獨立自治の精神を發揮して、卑屈の心を生ぜず、進取精勵の氣象を養成して、安逸に流れず、而も貴賤上下其の分に安んじて、毫も憾みなく、俯仰天地に愧ぢず、人間處世の本分を全ふすることを得ん、是の如く安心立命を決する所の、最深祕妙の要術、之を三大秘法と云ふなり。

以上佛教上の教觀二門のことは、大畧述べ終りたれども、之を廣義に用ゆれば、普通世間の風儀を補佐し、社會の道德を維持する目的より、なれるところのものは、著作にもあれ、雜誌にもあれ、新聞にもあれ、苟も之を讀むものは、善に付け、惡に付け、皆な切に之を身に承け、己か行爲を正すべき、龜鑑とする意得なかるべからず、即ち佛經に謂ふ、觀心の意得(本より宗教的と普通)なくんは、耳に入て、口に出る、口耳四寸の小人の學にして、何ぞ己か身を美くするに足らんや。

附言 方今吾邦の公德の欠乏を慨するものあり、曰く吾か邦に於て一家に於け

る、親子、夫婦、兄弟間の家族的道德は、他に比して幸に其發達を見るも、公德即ち他人と社會に對する、をほやけの德義に於て、一向に其發達を認むる能はず、時に少數者の之れ有るも、寧ろ歐米諸國に對比すれば、遙に數等を下れり、邦人の一大耻辱、蓋し之に超る莫しと、公德養成の急務を痛論せり、今其數例を擧れば、公園又は野外路傍の樹木の枝を折り、果實を竊み、或は宴會の席にて、ナイフ匙杯皿等の器物を持ち歸り、或は石を投じて街燈を破壊し、又は石塔紀念碑を倒し、或は神社佛閣を始として、人家の障塙等、到る處に落書を試み、或は旅館等にて、隣室に客人のゑるにも係らず、不遠慮に深夜まで大聲笑語し、甚たしきは三絃を弄して、歌舞し、又は拇拳を闘す等、喧噪を極め、他の安眠を妨げ、或は汽車馬車等の室内にて、己れ悠に座を占め、他人殊に老人小兒に、座を譲らざる等の如き、數へ來れば際限なきことにて、就中口に出すも、猶ほ戰慄を覺ゆる所の、舊臘、當市神田明神の歳の市、及び本年大阪今宮の十日戎に、數十人の死傷者を出すが如き、一大慘劇を演ずるに至れりと、吾が邦人の公德に缺くるあるものは、畢竟佛教に謂ふ、衆生の恩を知らざるによるなり、凡そ世界の中の人、各自職業を分つて之に従事し、互に勞力を

交換し、融通して相資くるを以て、安らかに世に處し得るものなれば、人々互に恩を負ふものなり、吾が邦人若し幸にして、此に想ひ到り、公德の實踐に躊躇せざれば、遂に人道の大義を、全ふすることを得べし。

讀者、試に上來の所述によつて、更に熟ら吾が所謂觀心を思へ、詮する所は、吾も佛にして他も亦佛にあらざや、若し互に害ひ傷るものあらば、之を佛と云ふべきか、公德とは、慈悲の謂ひなり、仁讓の義なり、同情を以て、誠を人に致すは、怨なり、佛の道なり、教觀の二門は、佛陀と衆生の相關に局る莫れ、轉じて以て之を吾人の心頭に運らし來れ、蓋し之く所ろとして、準繩たらざるなく行ふ處として、規矩ならざるなし、若夫れ曲直利害に至ては、一に各自が用意の精疎に存するか。

ふたば旃檀 (月の巻)

中村 孝 敬

頭を擧げて望み見よ 雲間も聳んぞく不二の嶺 巍々たる姿た勇ましき眼
を開て臨み見よ 比叡の下の琵琶の海 洋たる面て麗はしき 歴史を執て播け

ば 孝靈帝の其昔し 一夜に湧き出し物と聞く 開て原由を窮むれば 稜威も
尊とき靈妙の 皇ら帝の聖徳は 八紘率土に輝きて 高きを顯はす不二の嶺
深きを示す琵琶の海 説くも畏こき事なれど 皇統連綿今も尙ほ 九重深き雲
の上 允文允武の皇帝は 覆載の間に比類なき 不二の高嶺と諸共に 敷聖文
武の吾君は 世界萬國比ひなき 琵琶の湖水と諸共に 盡々未來の後までも
聖壽の無疆を祝ふなり

昨日の花は今日の月 昨夜の雪は今朝の花 四時の輪轉疾き事 旋火輪にも宛
も似たり 空前絶後の大偉人 天下獨歩の龍象が 生れ給ひし年月を 指を屈
して數ふれば 六百年と七十九 春秋重ねし昔しなり 春花は何時も變らねど
遷るは社會の進歩なり 月影今も變らねど 遷るは人の心なり 昨日の怨敵
今日の友 朝たの刎頸夕の敵 利不利の鉤鎖の作用にて 轉變自在も世の習ひ
人世行路の艱難は 山にも非らず河ならず 刹那に遷る人心 佛も棲めば鬼も
住む 人天あれば餓鬼もあり 聲聞出れば緣覺も 菩薩も出れば畜生も 修羅
も地獄も皆住めり 十界具足の人心 頼みも有れば又も復た 頼みもならぬ人

心圓轉自在の面白さ造化の巧みか知らねども表裏反覆娑婆の常面ての佛は内の魑魅言葉の菩薩は胸の夜叉双手を舉れば百八の煩惱無明は備はれり兩足下せば八萬の塵勞の過失は皆動ぐ是れを救はん其の爲に終始の困苦を身に擔ひ流罪死罪も覺悟して刀杖瓦石は朝の露毀譽と褒貶浮雲の跡を止めぬ清淨の盡壽變らぬ鐵と石絶對無限の大慈悲と内外亂麻の光明と五尺の體軀に滿ち溢れ活潑々地と躍り出て右手に正法高く舉げ生れ給ひし嬰な兒を善日磨と名けしる

善日磨の烟眼に映ぜし當時の我國は大々的の日本國大と叫びし其の聲は如何に人々聞きしかは是れより進む我筆の取くの跡にて知れよかし大とは國土の大ならず露骨に説かば尊稱の言の葉なる事知りぬべし大とは軍の大ならず多と勝との二義含む此れは佛書の定規なり多とは如何なる意趣なるか出でや拙なき我筆に任せて説明試みん鎌倉幕府執政の當時に起りし國難は大元蒙古の侵掠と草莽る野邊の小兒をも濱邊に彷徨ふ走盡も臥薪嘗膽奮ならず元の世祖忽必が股肱と頼みし杜世忠右手と望み

し何文著暴慢無禮の書を持して來りし年は我が建治勇斷果決の時宗は使者の罪をば打算して由井ヶ濱にて斬姦候斷頭場裡の露に化し日本の武威を耀やかし誇りを増せし其時に元の世祖は赫怒して使者を斬るとは無禮なり怒髪は冠り衝きしかば我の知らざる事なれど弘安四年の其年に世祖の撰びし勇將は忻都茶丘に范文虎智勇勝れし刺罕なり今又九筆の序にて彼れの兵卒數へ見ん鐵騎は十萬軍艦は四千餘艘と注せられ又此の外に三十萬此れは歩兵と知ぬべし高麗の軍士二萬五千兵船九百は吾國の歴史の示す所なり彼れの至元十二年鐵をも溶かす六月に四十二萬の軍兵を送るは常の事ならず能く能く思慮を廻らして事の禍原を窮むべし是ぞ幼兒の善日が造次頓沛東の間も我が日の本の國難を驚鏡に照らして煥々乎燎々乎たりと鑑みて生れ給ひし其時に邪義の蔓こる其國は國難起ると喚呼せし呱呱の聲とは覺れかし日本の上下は周章てたり東の道は西に行き南の阡陌北と見て人心安堵の思ひなく冠履顛倒淺間しき敵は博多を侵したり暴威掠奪我が意ろ雲間

に見えし光明は 此は青天霹靂か 波間に見えし火の光り 彼れは雷霆迅電か
 霹靂ならず電ならず 我が日の本の大和魂 農は鋤鋤振り翳さし 商は算盤
 提げて 日本の國民皆起てり 義勇奉公此時ぞ 敵は雲霞と寄せるとも 婦女
 は男子を助けつゝ 國家の禍災親り 打てよ懲せよ國敵を 進んで倒れよ君の
 爲め 命のあらん其限り 腕の續かん其間だ 勇みに勇んで進むべし 宸襟息
 すめ奉れ 生きて歸る事なかれ 老若男女皆起てり 國家舉つて皆起てり 山
 河草木皆兵よ 宇宙國土に比類なき 大和の錦と知ぬべし 是れぞ幼兒の善日
 が 生れ給ひし其時に 大々的の日本國 聲も惜まず獅子吼せし 大字の中に
 含まれし 多の意の義とは明らけし
 敵は無盡に働けり 敵は蕪地に侵したり 暴威を振ふ縦と横 大友少貳も破れ
 たり 國家の安危此の一舉 惟康親王身を以て 國家の難に代らんと 祈り給
 ひし其心 熱々思慮を廻らせば 肌に粟の絶え間なし 咄嗟の間だに翻へる
 旗差物の勇ましき 八つの龍の飛び差ふ 其の活動の目覺ましき 其圓形の美
 くしき 忽ち變ずる雲行の 南も北も皆同じ東も西も亦爾り 躍るは魑魅か魍

魍か 飛ぶは玄蛇か蛟龍か 變化自在の轉變は 記すも尊とき此れぞ是れ 北
 條幕府時宗の 反側憂慮の餘情にて 吾祖に請ひし圓形の 國難對治の曼荼羅
 の自在變化の活動か 敵艦總では覆へり 四十餘萬の國敵は 弘安四年の潤月
 七月初めの朔日に 皆も亡びし壯快は 國家の難の大なるぞ 比びて快哉も
 大なり 生きて歸るは唯三人 是れも全く皇帝の 稜威の餘徳と感すべし 見
 渡す限り風風きて 蒙古の戦艦影もなし 見渡す限り雲晴れて 遙に見ゆる志
 加の島 蒙古の首塚今も尙ほ 苔蒸す下に跡留む 歴史を緝く文客も 古蹟を
 吊ふ武の夫も 筆と劔を提げて 建國己來の我國の 他國の侵掠防々ため 壘
 み築きし空前の 壘での蹟を探り見よ 六百餘年の其昔し 我等の祖先が奉公
 の 血熱注ぎし膽腸は 今も昔の如くにて 玄海洋上何れにも 痕跡認めぬ限
 もなし 過にし昔の事なれど 國難動起の根底を 日蓮教祖の遺文にて 順序
 を逐て今此に 禍難の綱領提げん 正嘉丁巳の大地震 正元己未の大饑饉 加
 へて文應庚申 天下に疫癘蔓延し 數年に互る災は 書くも酸鼻の極にして
 民衆の過半を失へり 見渡す限りの野邊見るも 青きを帯びたる草もなし 到

る所の井泉も皆涸れ竭して滴もなし。牛馬は衝たに打ち斃れ、骸骨路に横はり、悲風慘愴酷の酷。公衆も今に盡きなんと。戦々慌々人心。當時の事を能く知るは、東鑑に如くはなし。吾等の尊とむ教傑は、天に鑑み地に俯して、時世の動機を看破して、正嘉二年の春の頃、衣を振つて駿州の塵埃侵さぬ若深き巖本寶藏に端坐して、瞑目潜慮の其の姿た、石像模型に異ならず。電光石火の一刹那、徹底大悟の胸の裏、飛ぶは飛龍か白雲か。躍るは禍亂の動機なり。動くは動くの日にあらず。起るも起るの時ならず。國家を忘れぬ教傑は、義勇を叫びし吾祖なり。奉公唱へし聖傑は、民衆を憐れむ蓮祖なり。熱腸溢れて火の如し。猛騰凝つて斗の如し。權威の勝れし北條も、智慮の高も時頼も、禍亂の動隙知り難し。奮然驟起の傑聖は、七難並起の原由をば、血を磨り流して墨となし。身皮を剝て紙となし。熱骨削つて筆となし。四千七百有餘言。君の御爲め、國の爲め、公衆の爲めと獅子吼して、文應元年庚申、而も七月二八日、宿屋左衛門光則を介して幕府を諫曉す。此れぞ幼兒の善日が、生れ給ひし其時に、大々的の日本國、聲をも借まらず叫ばれし。皇統勝れし吾國の、無上の國

体服膺し、大字の中に含まれし、勝の意味とは煥乎たり。拙なき筆にて今一步、我が國体の殊勝をば、歴史の上にて試みん。神武の建國今此に、二千五百有餘年、金甌無缺は我國の精華なること異論なし。誇る所は此精華、耀く光りも此精華。大和錦きの麗はしさ、皇統連流の國体は、異國に比例を探り見よ。斷々乎として比ひなし。弱者の肉は強の食、互相殘害啖食。蠶、骨肉反噬修羅の所爲、互に倒しつ倒されつ。左を立れば右亡ぶ。前を滅せば後を立つ。蓬草亂麻の國々は稻麻竹葦の如くなり。吾等の愛する大偉人、光る精華の我國に、垂迹示現も縁由あり。此にて筆を轉ずれば、元の世祖の忽必が、至元三年丙寅、我が文永の三年に、兵部侍郎の黒的と、禮部侍郎の殷弘を國使としての差遣なり。然るに我れに着せしは、文永五年の初め日、幕府は如何に騒きしか。執政時宗又た外に、政村等の評議あり。來書が無禮を楯に執り、我れの報牒中止せり。大喝一聲時宗を叱咤の響は霹靂か。高嶺に戦々松籟か。海邊に寄する波風か。黙して止むべき時ならず。遁れて隠るゝ時ならず。國家の爲に身命を賭して教ゆる教傑の、慈悲の言語と知ぬべし。七千餘言の

安國は我れの骨髓頭腦なり。我れの豫言は符合せり。汝が時宗知らざる耶。正義は最後の勝利なり。濁らぬ我れの鑑識は、秦の鏡に勝れたり。鈍らぬ我れの活断は、龍泉莫耶に超過せり。我の身命我れならず。國家に捧げし髮膚なり。我れの諫言我れならず。聖教指南の羅針なり。國家の爲に棄る身は、蔽履を扱ぐより最も易し。蒙古差遣の此使者は、我が國禍亂の動機なり。國家安危の水際は、鑑に懸けて見る如し。菴羅を執て見る如し。金甌無缺の我國は、神武の御代より今も尙ほ、他國の侵逼蒙むらさ。然るに汝の愚蒙ゆゑ、汝が祖先の罪過をば、汝の罪過と知らざる耶。禍亂の根底最も深し。國難慎しみ恐るべし。蒙古の使節は最も怪し。國辱蒙むる端緒なり。我の懸識符合せり。時宗汝は覺めざる耶。虛空に懸る日月は、假令天地に墜るも、我の豫識は抵牾せず。佛法宣布の其の爲に、身命抛つ賢聖は、星の如くに多くとも、砂礫の如くに並ぶとも。未萌を知る者未だ無し。未萌を知て告げざるは、君の爲には不忠なり。國家の爲には不臣なり。此れぞ幼兒の善日が、眼に映せし大日本。叫び給ひし呱呱の聲、大に含みし勝の義の、意味なることは明らけし。

時は正しく文永の八年九月十二日、吾祖の苦諫は容られず。容られざるは恕すべきも、方外沙門の身を以て、政事を議する無禮もの。國家の大事に依託して、漫りに幕府を非難なす。其の重罪は恕し難し。即日捕縛の状況は、常議已外の所業なり。古今未曾有の俊傑は、莞爾と微笑を湛へつゝ、北條時宗狂せしか。平の頼綱迷ひしか。我は日本の柱なり。柱を倒せば皆倒る。我は日本の鑑なり。鑑みを毀てば皆曇る。我は日本の船なるに、船をば棄て、世の正義正義の海は越へ難し。鎌倉街道西東、縦横無碍に引き廻はし。聞くも恐ろし龍の口。断頭場裡は風の露。吾師の冤枉耳にして、維摩も凌ぐ外護の人。四條頼基眞先に、袴の装を高く取り、白衣を着せし風彩は、殉死の覺悟と知られたり。吾祖は泰然安座して、鼎鑊前に不知火の、邪見の劔ぎの尖先も、逆かしら人の逆か事と、國家を憂ふる増す鏡。寫すは蒙古の禍難なり。大刀執る人は依智三郎。水をば周圍に撒き散らし、干將を凌ぐ蛇胴丸。二尺餘寸と知られたり。天津日嗣の御光りも、曇り行くなり蜘蛛の、雲の空行く面白さ。我ぞ知らさ入口の本の、國家の存亡を皆人に、憐へ動かぬ吾國の、不二の高嶺と諸共に、松の

緑りの琵琶の海 湛たへ溢れん我が抱負 皇ら帝の其の爲に 普天の下の人の
 爲め 高く掲げし職た標るし 妙法蓮華の綵錦 大和心と織り成せる 猛火の
 如き真心を 如何で神祇の知らざるや 不思議と叫ぶも愚かなり 正義の頭へ
 に神宿る 宿るは我れの爲めならず 國家の爲に宿るなり 天には霹靂地は震
 動 晝をも欺むく月光も 瞬たく間に消え去りて 邪見の劔さも收まれり 此
 れも幼兒の善日が 生れ給ひし呱々の聲 聲の響きし結果なり 積みなす雪は銀
 四箇の星霜佐渡が島 艱苦を忍ぶ龍象が 配所の月に嘯いて 積みなす雪は銀
 世界 往來絶へし蓮台野 三昧堂の状態は 屋根は七尺雪一丈 中に潜みし大
 丈夫 屈むは伸るの標識か 降り布く雪の色白き 白きは純白雜りなき 國家
 の憂苦を身に擔ふ 他事なき現證なりぬへし 春花秋月其の晨た 夏涼冬雪其
 の夕べ 松風寒き春の夜も 月影清き秋の晨 雨降る夜半も 風の日も 順徳院
 の御陵に 讀誦の聲も絶え間なし 食事は雪を噛むとて 梅は石に坐すると
 も 衣は脛を顯はすも 國家を忘れぬ龍象が 熱血凝て暖ど化し 氣精は變じ
 て食となり 大鵬萬里の雙翼を 伸るは方に遠からず 法藏法師の烙印も 雪

山童子の投身も 常啼菩薩の身を賣るも 善財童子の火に入るも 樂法梵士の
 身を剃るも 藥王菩薩の臂焼くも 師子尊者の刎頸も 不輕菩薩の大難も 佛法
 弘宣の爲めと聞く 提婆菩薩の殺戮も 亦た此れ同じ法の爲め 我れの窟配法
 の爲め 國家の大難遠からず 蒙古の侵撃近づけり 若しも赦免を蒙むらば
 直に幕府に肉薄し 禍難の迫るを苦諫せん 天涯萬里の雲間より 赦免の羽檄
 は墜下せり 時は文永十一年 甲の戌の花の頃 松葉ヶ谷の草庵に 本化の法
 陣復た布けり 毒鼓の響も盛なり 此れも幼兒の善日が 生れ給ひし呱々の聲
 聲の響きし果實なり 我祖の遺せし撰時鈔 親しく文面拜すれば 鎌倉幕府の戦慄も 窺ひ知ること
 難からず 時は赦免の四月なり 平の頼綱威儀正し 蒙古の襲來確乎たり 活
 證達觀感じたり 聖鑑少しも疑はず 避くるに途なき此禍難 年月何れを指示
 する耶 國家の爲に諭されよ 吾祖は憂苦を胸に滿て 聖教居諸を指さるるも
 幕府を始め日本國 頑迷不靈其上に 正義の佛法弘まらず 時宗其他も邪に
 歸して 正義の宣傳塞ぐ故 皇天皇土の激憤は 底止の所更になし 蒙古の反

華今年を踏へざる事と信ずべし。果然其年十月に耳を裂んとく吶の聲。數
 萬の國敵我國に阿修羅の如く攻め入て。壹岐と對馬の二個國は瞬たく間に
 攻め落し。宗の資國又た外に。太宰の景頼破れたり。空前未曾有の國難は。史
 籍の證する所なり。見よや國家の柱石を。以て任ずる俊傑の。千辛萬苦の考證
 は。兎毛の如くも。謬まらず。大聲疾呼の警鐘の。亂打の響は止まざるに。敵の
 狂火は我國の。民衆の生命焼き盡す。弘安四年の國難は筆の序でに前段に。樞
 要を執て書せし故。煩はしくは今説かず。此れも幼兒の善日が。生れ給ひし呱
 々の聲。聲の響きの餘音なり。二葉の栴檀香ばし。異香は末法萬年を。過ぎ
 て未來の後までも。絶えず滅せず香ふなり。

高祖御降誕日に就きて

幸 田 成 行

人の世に生れて初めて呱々の聲をあぐるをば、貴賤賢愚共に誕生といひて、其兒の
 父母はこれが聲を聞くがために、心の勇みを發して言ふべからざる歡喜を覺は、其

一族朋友もまた慶びを願ちて共に笑を含み勇をなす習なり。
 さて又其次の年より年々歳々恰も其日に當る日をは誕生日といひて、はれひと共
 に祝ひ歡ぶ。これまた世の習ひ人の情、まことに然るべきことといふべし。凡庸の人
 はかくて止めども徳高く功大なる人に至りては、其人既に世にあらざるなりて、其
 人の恩澤永く存するをもつて、娑婆の嘗て初めて其人の降臨を得たる日を此世に
 取りていと悦ばしき日として、其日に當りて人々の相慶び相賀し、つとめて之を悦
 ぶところの心の誠を表はさんとする。今日の悦ばしき會合の如き即是也。
 さればまことの誕生の其日といひ、歳々の誕生といひ、また後の人の相慶び相賀し
 て歡喜踴躍の真心を表はす今日の如き會合といひ、いづれかまことに悦ばしから
 ざらん。眉を開き聲をあげ、拊舞して以て悦ぶべき也。
 されどもこれはこれ尋常の談なり、殊勝の談にあらざる。凡夫の上の事なり、聖者の上
 の事はこれに盡くべからず。

今日是我か宗高祖大士御降誕の日に當るをもて、其悦ぶべきは論勿きなり。まこ
 とに幾百年の上に在つて、今月今日を以て高祖の此土に降誕ましませしは、相慶び

相賀すべきは勿論ながら、今月今日はいかに幾百年前の今月今日の記念の日としてわれわれの慶賀すべきのみならず、また實に不可思議の所以あつて相慶び相賀すべきの日なりとす。何をか不可思議の所以あつて相慶び相賀すべきの日なりとす。何をか不可思議の所以あつて相慶び相賀すべきの日なりとす。いふか。蓋し高祖はたゞに貞應のむかしの今月今日に降誕し玉ひしのみならず、また實に明治の今年の今月今日に於ても、有縁の各處に於て降誕あらせ玉ふともとなり、其むかしの御降誕だに慶ぶべく賀すべきに、まして現前の御降誕なり、慶ぶべくもまた慶ぶべく、賀すべくもまた賀すべきならずや。かく言はれ、其むかしの御降誕は聞こえたることなるが、現前の御降誕とは如何なることぞや、と訝る人もあるべけれど、こは訝るべくもあらぬことなり。聞き玉はずや、埃及の其むかしに當りて收め置きたる種子の中には、何千年を経たる今日猶其發芽の力を失はずして、之を播きしに頓て萌え生でしものありとといふにはあらずや。因の力の殊勝なるものは果敢なき穀物の種子だに左ばかりの力はあり、まして我が高祖の英靈俊偉の氣の如何で僅に貞應に初めて起りて弘安に全く終れるに止まらんや。凡夫こそは生きながらに死せるも有るべけれど、聖者は逝り玉ひても常に留まりたまふ定めなり。

こゝに無智昧の輩ありて、今月今日の縁によりて、初めて高祖の御名を聞き御教を聞き、信受せんには、申すはかしこきことながら、即ち其人の胸中に今月今日我が高祖の現前に御降誕ありしと申すもの也。南無妙法蓮華經の其響きは、即ち御初聲と申すもの也。世にも雄々しくいささよき其御聲は、之を聞くものに限り無き心の勇みを發せしめ玉ふ也。言ふべからざる歡喜を覺えしめ玉ふ也。其一族朋友をして共に笑を含み勇みをなして其慶びを頌たしめ玉ふ也。むかしの御降誕、今の御降誕、いづれを御垂迹とやせん、いづれを御本地とやせん、彼や御方便なるべき、此や御本願なるべき、既に本迹異なりと雖も、不思議は一なりと承はり及べば、思ふに古今隔たると雖も、妙趣は差無からん。今月今日をば、たゞに幾百年前の今月今日の記念の日としてはれ、の慶賀すべきのみならず、また實に不可思議の所以あつて相慶び相賀すべきの日なりと申すは、是の如きの故あるをもて也。

おもへば、凡夫の誕生とは一塊の肉の穢土に現はるゝに過ぎぬなるを、それにすら眉を開き聲をあげて柝舞して悦ぶ習ひなるに、まして胸の海の斷ゆる時なく風荒み浪騒げるが中に、聖者の御降誕を得て其雄々しき聲を聞き、其利益を被るを得た

る悦ばしきは、そもこれに何と云はん。高祖去り玉ひてより既に幾百年しかも其英靈俊偉の氣、凛として今に存し玉へば、因の力は既に殊勝なり、機に觸れ縁によりて隨處に出現したまはんとす。今月今日は有縁の日なり、化益まことに測るべからず。此日の縁によりて其胸中に高祖の御降誕を得、御慶を聞き、心の勇みを發し、歡喜を覺え、従つて一族朋友にも其慶びを願つに至るもの、幾許ありや知るべからず。まことに慶ぶべく賀すべきならずや。是の如くにして明年の今月今日も悦ぶべく、其次の年も悦ぶべき、又其次の年も悦ぶべく、閻浮提に衆生あらん限りは盡未來際悦ぶべし。されば今月今日の我等が悦びは、たゞに過去をしのびて悦ぶべきのみならず、また現在未來をかけて悦ぶべき也。たゞ一トわたりの義のみならず、二重三重の義ありて悦ぶべきなり。悦ぶべきかな今月今日、悦ぶべきかな今月今日、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

高祖御降誕の其月其日

明治三十四年二月十四日印刷
 全 年 全 月 十 六 日 發 行

非賣品
 禁轉載

東京市芝區二本榎壹丁目十八番地宛

編輯者 兼 發行者 荻 米 是 寛

全 所

發行所 宗 祖 降 誕 會

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者 白 土 幸 力

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三 光 堂

(電話本局一二九九)

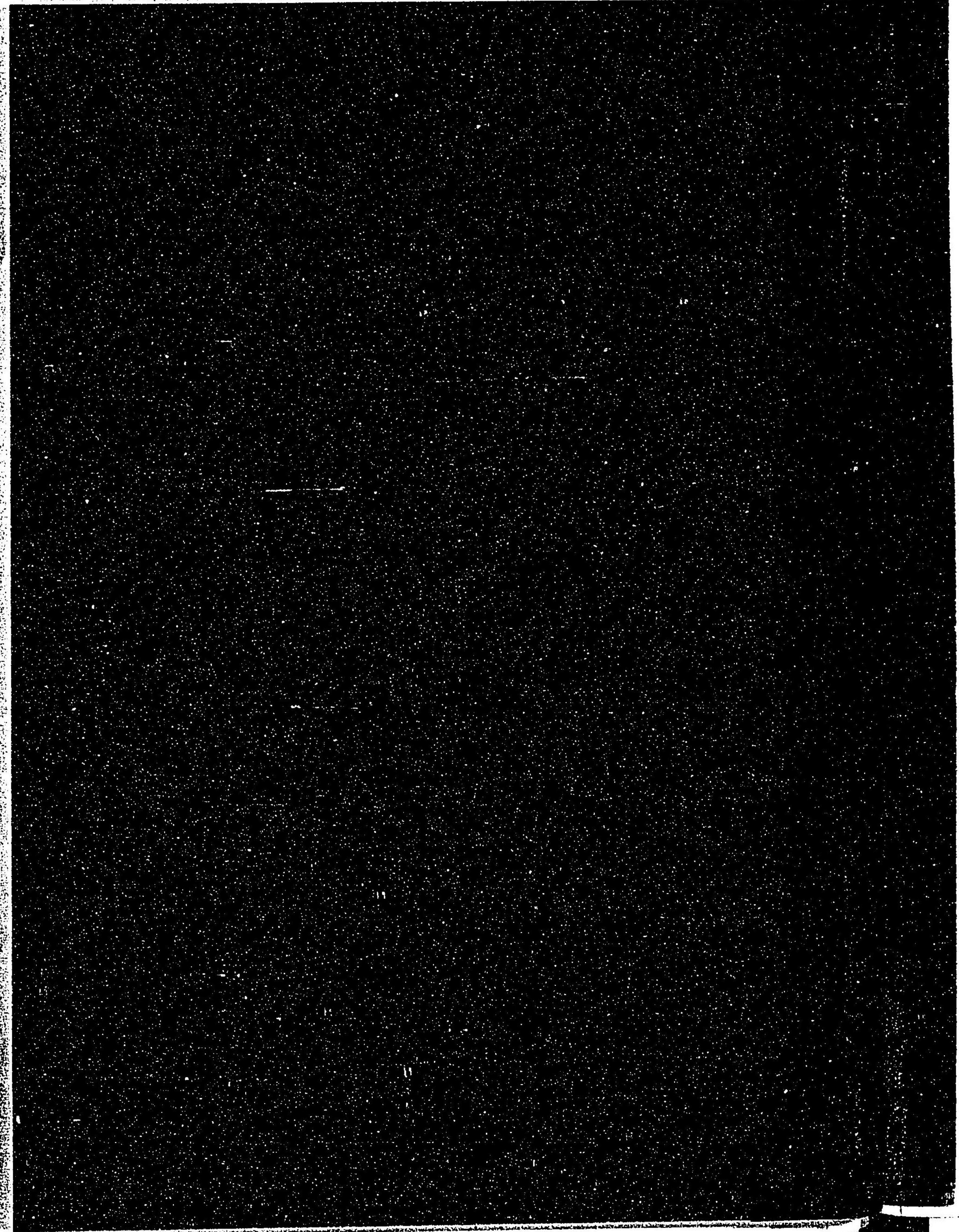
中華民國二十九年...

...

...

...

...



9

蓮のかをり

国立国会図書館

020106-000-1

特49-929

蓮のかをり

宗祖降誕会

M34.2

ABH-0308



